

才さかし出ではべらむよ — 『紫式部日記』の一文—

栗田 岳

要旨

『紫式部日記』の「才さかし出ではべらむよ」という一文（「当該箇所」と称する）について、「さかし出づ」と「むよ」の実例を調査し、以下の結論を得た。

まず、当該箇所に見られる「さかす」は、「【才】を盛んな状態にする」意である。さらに、それが「出づ」と複合した結果、「【才】を【さかす】ことによって、【才】が表に【出づ】」という構造を成す。したがって、「才さかし出づ」とは、「才知を盛んな状態にすることによって、その才知が表に現れる」の如く解釈するのが適当である。

一方、述語にムヨを持つ文には、言語主体の、「自身の当然とするところから外れた事態が、未来時において避けがたく生じてしまう」という判断を表す例があり、当該箇所も、その一つと見られる。

以上を総合するに、当該箇所とは、「宮中で才知を働かせて、それが人の知るところになる」という事態は、謙抑を当然とする自分本来の姿からは外れているけれど、その事態がこの先に生じてしまうことは避けがたい、と嘆息する文である。そして、この解釈は、当該箇所が続く『紫式部日記』全体の文脈と調和している。

キーワード：ムヨ、さかし出づ、推量、疑問文

1.

左衛門の内侍といふ人はべり。あやしうすずろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ心うきしりうごとの、おほう聞こえはべりし。うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がる」と、殿上人などにいひちらして、日本紀の御局とぞついたりける。いとを

かしくぞはべる。このふるさとの女の前にてだにつつみはべるものを、さる所にて、才さかし出ではべらむよ。

『紫式部日記』の一節である¹⁾。『源氏物語』を目にした一条天皇は、その作者が『日本書紀』に通じた学才ある人物であると述べる。それを受けて、女房・左衛門の内侍は、紫式部が己の才をひけらかしていると言いつて、「日本紀の御局」なるあだ名までつけた。こうした状況を「をかし」と評してみせた後、日記は下線部の記述「才さかし出ではべらむよ」へと続くのだが、その下線部に関わって、諸注は次に引くような解釈を提示している（以下、下線部を「当該箇所」と称する）。

- 1 そうしたところでどうして学才をふりまわしましょうか。
(『日本古典文学大系』)
- 2 そんな宮中のようなところで、どうして学問をひけらかしたりするのでしょうか。
(『日本古典文学全集』 新編も同様)
- 3 どうして、そんな宮中などで学のあるところを披露に及ぶなどということをやろうするものですか。
(『紫式部日記新釈』)
- 4 これは上に「など」「いかで」等の疑問副詞が省略されていると見るべきであって、
(『紫式部日記総索引』)
- 5 そんな宮中なんかで、学問をひけらかしたりしましょうか。
(『紫式部日記全注釈』)
- 6 そんな宮中のような場所で、学識をひけらかしたりいたしましょうか。
(『新日本古典文学大系』)
- 7 宮中などで学問ありげな、賢さうな顔などはしない。
(『日本古典全書』)
- 8 学識をひけらかすようなことはね。
(『新潮日本古典集成』 第1刷)
- 9 学識をひけらかしますなんて。
(『新潮日本古典集成』 第4刷)

見られるように、1から6は「才さかし出ではべらむよ」を疑問（この場合、より限定的には反語）の文と了解する。「どうして」の類を読むか（1から4）、読まないか（5と6）という、問えば問えるような差異も認められるけれど、いずれにせよ、反語という形で「さかし出づ」を打ち消すのである。なお、7は、1から6のヴァリエーションと言えるであろう。疑問（反語）という過程ではなくて、打ち消しという結果のみを示すわけだ。しかしながら、この疑問的理解とは、文中に疑問を表す要素がないにも関わらず、それを読み込んで文意を通そうとするものである。便宜的な処理との誹りを免れるためには、そうした読み込みが可能とされるだけの論理を提示しなければならないが、現状では、なかなか十分に説明されたとも言えないように思われる。一方で、8と9は、こ

れら疑問的理解と趣を異にする。本稿が参照した第1刷と第4刷の間には、ニュアンスに富んだ表現の模索の跡が窺えるのである。しかし、これら8と9においても、なぜそのように解釈しうるのか、明らかにされてはいない。

本稿は、諸注に定見を見たとは言いきれぬ、この当該箇所について考えていくものである。

2.

初めに、「さかし出づ」という動詞の意義を確認する。冒頭に引くように、諸注の多くは、「さかし出づ」の口語訳に「ひけらかす」「ふりまわす」といった否定的なニュアンスの語を充てている。なるほど、諸注の文意の取り方からすれば、そうした否定的なニュアンスの訳出は一つの自然であろう。しかし、「さかし出づ」という語自体が、否定的な意味合いを持つのか否かについては、改めて検討が必要であって、以下、それを行うことにする。

まず、単独の「さかす」が、どのように使用されているのかを見よう²⁾。

- a みき丁のほころびよりはつかにみいれたり。大納言殿のまゐり給へるなりけり。(中略)「み丁のうしろなるはたれぞ」ととひ給なるべし。さかすにこそはあらめ、たちておはするを、なほほかへにやとおもふに、いとちかうみ給て、
(枕 宮にはじめてまゐりたるころ)
- b 入道の領じ占めたる所どころ、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、興をさかすべき渚の苫屋、行ひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を立てて三昧を行ひ、 (源氏 明石)

aの清少納言は、当時、出仕したてであったため、中宮のもとに訪れてきた伊周到に物怖じして几帳の陰に隠れる。伊周は、几帳の奥に誰がいるのか好奇心を示し、その後、側にも寄ってきた。この、好奇心がただの好奇心では済まずに、接近という行動に至ったことに対して、「さかすにこそはあらめ」という注釈が付される。即ち、「さかす」という事態があったからこそ、伊周の好奇心はそのまま終息せず、行動へと駆り立てられたというわけだ。「さかす」は、伊周が行動に至ったことの原因に当たるのである。これを諸注は、「(女房が伊周を) そそのかしたのであろう」の如く解釈した。実際、用例aの現場においては、そうした「そそのかし」がなされたのかもしれない、よって、大意を把握するという意味では、「そそのかす」でも、さほど大きく外れてはいまい。しかし、あくまで「さかす」という語にとっては不都合であろう。bなど、他の例をも視野に入れなければならないからである。では、aの「さかす」は、どう把握しておくのが適当

か。aでは、女房の「さかす」行為の結果、伊周の好奇心が行動にまで結びつたとされるのだから、ここの「さかす」は「好奇心を盛んな状態にする行為」であったと言え、そう考えると、bの「さかす」との関連は容易に辿りうるであろう。bとは、明石入道の住まいに、折々の興趣を「さかす」渚の苫屋が設けられていると述べるものである。「そこからの眺望によって、人の感興が盛んな状態になるよう、しつらえに工夫を凝らした苫屋」と解しうる。即ち、a・bいずれの「さかす」にも「人間の興味・関心を盛んな状態にする」という性格が看取されるのである。そして、一見、趣を異にする次のcも、これらの類例ではないだろうか。

- c 「さはありとも、音聞きあやしや。人はみめをかしきことをこそ好むなれ。『むくつけげなる鳥毛虫を興ずなる』と、世の人の聞かむもいとあやし」と聞こえたまへば、「苦しからず。よろづのことどもをたづねて、末を見ればこそ、事はゆゑあれ。いとをさなきことなり。鳥毛虫の、蝶とはなるなり」（中略）とのたまふに、言ひ返すべうもあらず、あさまし。（中略）これを、若き人々聞きて、「いみじくさかしたまへど、いと心地こそ惑へ、この御遊びものは」「いかなる人、蝶めづる姫君につかまつらむ」とて、（堤中納言 虫めづる姫君）

両親から、毛虫を愛玩することを咎められた姫君が、理詰めで反駁する。両親は返す言葉もなかった。そのやりとりを聞いた女房の言葉に「さかす」の語が現れており、ここでの「さかす」は、以下のように考えられてきた。

『増訂堤中納言物語評釈』（京都印書館）

「いみじくさかしうし給へど」「いみじくさかしくし給へど」などの誤写と思はれる。原文のままでは通じない。

『堤中納言物語全評釈』（有精堂）

「さかす」は、「取扱う、持てはやす、やりくりす、きりまわす」などの意。現在でも越後方面には日常の語として、「さばく、売る、商う」などの義にも使用して居る。蒲原郡地方は、日常一般に、何人にも使用せられて居る。「さかしかる」の「さかし」とは全く異なる語である。中央には死語であり、方言的に残っているに過ぎない。

『日本古典全書』

「興をもよほす」の意か。

『日本古典文学全集』

「さかす」は、持ち扱う意で方言にのみ残る古語。「時々につけて、興をさかすべき渚の苫屋」（源氏・明石）は下二段とされているが同類の語か。「揚」を「サカス」

と訓ずる（類聚名義抄）。

『新潮日本古典集成』

いやにもてはやしなさるけれども、

『新日本古典文学大系』

不詳。「(虫を) 探し給へど」の意か。東北方言に言う「上手に取り扱う」意の「さかす」と説く向きも。

『新日本古典文学全集』

「さかす」は、表だつて取り扱う、ひけらかす、の意。「時々につけて、興をさかすべき渚の苫屋」（源氏・明石）も同類の語か。『類聚名義抄』に、「揚」を「サカス」と訓ずる。

見られるとおりの諸注の間で解釈が分かれるのである。また、これらを見るかぎりでは、どの説がもっともであるのかも判然としない。

そこで、もう一度、文脈を追うことにしよう。姫君の行動を「さかす」と評した女房の発言は、「これ（＝姫君と両親のやりとり）を聞きて」なされたものである旨、記されている。だから、この「さかす」も、姫君と両親のやりとりに関わるものと考えるのが自然であろう。そして、そのやりとりとは、姫君が弁舌によって両親をやりこめるといふやりとりであった。『増訂堤中納言物語評釈』は、こうした文脈に沿って、「やりこめる」＝「さかしく振る舞う」と考え、「さかしくし給へど」等の誤写を想定したのであろう。しかし、本稿は、別に誤写と見る必要もないと考える。先の a・b において、「さかす」は、人間の興味・関心を盛んな状態にする動作の云いだったけれど、「さかす」の対象が興味・関心に限られなければならない理由はない。興味・関心とは「さかす」の対象の一部なのであって、「さかす」は、それら興味・関心を包含する、人間の思考・感情全般を対象とするのではないか。即ち、c の「さかす」は、姫君の頭脳が、両親を理路整然と論破するほどに、盛んな状態にあることを表しているのだ。よって、ここで女房は、姫君が才気煥発さを発揮させて、自分の好尚を正当化しているけれど、やはり毛虫を愛玩する様は受け入れられないと述べていることになる。

こうした c の「さかす」は、実は、当該箇所に見られる「さかす」と、よく似ているように思われる。当該箇所「才さかし出ではべらむよ」において、「さかす」の対象とは「才」、つまりは、紫式部の才知であった。このように、頭脳の活発な働きを述べる点、当該箇所は c に通う。つまり、当該箇所の「さかす」は、「自身の才知を盛んな状態にする」という事態を表すものかと思われるのである。

以上の如く、当該箇所に関しては、「さかす」を「人間の思考・感情を盛んな状態にする」意と見ておけば、それで過不足ない。しかし、「さかす」という語自体は、「人間の思考・感情を盛んな状態にする」ことに止まらぬ広がりを持っているようだ。たとえば、

次に引く d を見られたい。

- d 色々の御衣ども、色を尽くし、解きほどこき、御衣架を並べ、御調度、色を尽くし、品を整へ、御鬘ども、丈を整へ、数を尽くして、方々さかされたり。

(うつほ 祭の使)

正頼邸での七夕の宴が、衣装や調度などを豪勢に整えて執り行われる。「方々さかされたり」とは、そうした諸々の支度によって、宴が盛大なものなることを指すわけである。そして、この d の如き例を考慮に入れると、「さかす」とは、「人間の思考・感情」に限らず、ものごと全般を「盛んな状態にする」意と考えられるであろう。「さかす」は、その形態上、自動詞「さかゆ」に対応する他動詞形とされることがあるけれど、上述の性格を考え合わせると、意味的にも、もっともな見解と言えらると思う。

ここまでは、単独の「さかす」について考えたが、当該箇所「さかす」は「出づ」を伴って「さかし出づ」という形をとる。「出づ」を後続させた「さかす」は、いかなる意義を担うことになるのか。その際、参考になるのは、「さかし出づ」と同様、複合の前項が他動詞で、かつ、後項を「出づ」とするような例だろう。「さかし出づ」は、それら「～出づ」と基本的な構造を共有するのである。以下、その「～出づ」の例を示す³⁾。

- e 火の、おほきにてつゆ黒みたる所もなくめでたきを、こまかなる灰のなかより、おこしいでたるこそ、いみじうおかしけれ。 (枕 節分違へなどして)
- f 人にも見え給はで、逃げ出でたまひにけり。「愛宕になん」「清水に」などゆすりて、つみに尋ね出でて、ながしたてまつると聞くに、 (蜻蛉 中)
- g むかし、世ごころつける女、いかで心情あらむ男に逢ひえてしがなと思へど、いひ出でむたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす。 (伊勢 六三)

e・f・gに見られる動詞、「おこし出づ」「尋ね出づ」「いひ出づ」を、【NヲV出づ】というモデルに基づいて考えていく。Vは前項の他動詞、Nは、Vと「出づ」の複合が、対象として取る体言を指す。「V出づ」は、それ全体として、Nを目的語とするのである。これをVと「出づ」の単位に分けて考えると、Vは他動詞なのだから、Nは、Vに対しても、そのまま目的語としての位置に納まる。しかし、一方の「出づ」は自動詞であって、目的語を持つことはない。「出づ」にとってNは主語、動作「出づ」の主体として位置付けられるのである。即ち、「NをVして、Nが出づ」という構成である。こうした他動詞と自動詞の複合は、現代語にはなじみが薄いけれど、古代語には、まますみ見られる現象のようだ。そして、先のe・f・gそれぞれを見ても、そこには、「Nに対してVの動

作を行うことによって、Nが表に現れる(=「出づ」)という性格が認められるのである。まずeを単純化すれば【火をおこし出づ】となる。灰の中から「火」(N)を「おこす」(V)ことにより、立派な「火」(N)が現れ(=「出づ」)、それを「おかし」と評するものである。fでは、出奔した「西の宮左大臣」(N)を「尋ね」(V)、その結果、「西の宮左大臣」(N)が発見される(=「出づ」)。gは、「心情あらむ男」との逢瀬を願うものの、「言ひ出づ」ることができない女に関わる。「願い」(N)を口に出して、即ち、「言ふ」(V)ことによって、その「願い」(N)が表沙汰となる(=「出づ」)ようなきっかけがないわけである。

以上をふまえて、当該箇所「さかし出づ」を検討する。前節で確認したとおり、ここでのV「さかす」とは、N「才」を盛んな状態にする動作のことであった。そのような「さかす」という動作を行った結果、「才」が表出される(=「出づ」)のである。より当該箇所の個別に即して述べるならば、紫式部が己の才知を盛んな状態にした結果、その才知が顕わになるということだ。こうした「さかし出づ」という動作は、時により、或いは人により、「ひけらかす」「ふりまわす」といった感想が持たれることもあるだろう。だから、既説が「ひけらかす」「ふりまわす」の類を「さかし出づ」の訳出に用いても、そこに文脈上、特段の齟齬が生じていたわけではない。しかし、それはあくまでも意識である。本稿は、これまで「さかす」について考え、さらに、それと「出づ」との複合について考えてきたが、そのかぎり、「さかし出づ」には、「ひけらかす」「ふりまわす」の如き否定的なニュアンスを読まなければならない理由はなかった。むしろ、bには、肯定的なニュアンスが看取されるのだから、これを併せて考えれば、「さかす」は肯定的・否定的の別に立ち入らない語とすべきであろう。したがって、当該箇所も、より中立的な解釈、たとえば「披露する」などとするのが適当であると考えている。

3.

当該箇所の解釈は、述語にムヨを持つ文(ムヨの文)をどう把握するのかによって、大きく左右されるであろう。次に、本稿の見た範囲でのムヨの文全7例を示す⁴⁾。

【A】

- h すべて男の物見るに、只ひとり乗りて見るこそあれ。(中略)若きをのこなどの、ゆかしがるをも、ひきませよかし。すきかげに只ひとりただよひて、心ひとつにまぼりみたらんよ。(枕 いみじう心づきなきもの)
- i 三尺の木丁、おくのかたにおしやりたるぞあぢきなき。端にこそたつべけれ。おくのうしろめたからんよ。(枕 七月ばかり、いみじうあつければ)
- j あはれなることなりや。親子と見ず知らざらむよ。誰ならむ、と聞きたまふほどに、

【B-1】

- k 右近、いとゆゆしくも言ふかな、と聞きて、「(前略)今は天の下を御心にかけてまへる大臣にて、いかばかりいつかき御仲に、御方しも、受領の妻にて品定まりておはしまさむよ」と言ふ。(源氏 玉鬘)

【B-2】

- l かかれば、いみじうくちをしと思ひて、帯刀が返りごとに、「(前略)さても世の人は、今宵来ざらむとか言ふなるを。おはしまさざらむよ」と書けり。
(落窪 卷一)
- m 「(前略)かく人づてならず心うきことを知る知る、ありしながら見たてまつらむよ」と、わが御心ながらも、え思ひなほすまじくおぼゆるを、(源氏 若菜 下)
- n 知らぬ人に具して、さる道の歩きをしたらんよ、とそら恐ろしくおぼゆ。
(源氏 手習)

【A】【B-1】【B-2】という区分については後述することとし、初めに、これらのムヨの文すべてに共通する性格を確認しよう。ムヨに上接する事態とは、いずれも「言語主体の当然とするところから外れた事態」なのである。たとえば、hの清少納言は、祭見物とは複数で行ってこそそのものと考えている。そのような清少納言からしてみると、一人での祭見物など、その主旨に悖るのだ。iは、外からの人目を遮るための几帳が、外に面した部分ではなくて、部屋の奥に置かれていることに関わる。「おく」が「うしろめたし」など、本来あるはずがないと言いたいのだと思われ、ゆえに、言語主体・清少納言の当然とするところから外れた事態と言える。jでは、石作寺に参詣に来た仲忠が、父親を知らないという子(小君)に遭遇して同情の念を覚える。子として親を知らぬとは、人の世に当然とされる在り方であるはずもなく、したがって、いま言語主体の仲忠が目にした小君のありさまとは、仲忠の当然とするところから外れてもいるわけだ。kの右近は、玉鬘を受領に縁づけたいと願う三条に対して、本来、権門の娘である玉鬘が、先々、受領の妻程度に納まるなどありえぬことと述べる。そんな事態は、右近の当然とするところから外れているのである。lの場合、男君が通って来られないと言う晩は、「三日夜」に当たる。そうした節目の晩に通って来ないとは、男君と落窪の君の取り持ちに奔走したあこきにしてみれば、自身の思いを踏みにじるようなことである。さらに、ここに見られる「今宵来ざらむ」とは、「ゆふけとふうらにもよくありこよひだにござらむきみをいつかまつべき」(拾遺和歌集・恋三・八〇七)を踏まえるという⁵⁾。さすれば、ここには「三日夜に通って来ないような人に、先々の訪れは期待できない」という含み

も読み取られ、あこきにとっては、ますます当然とするところから外れた事態ということになる。mは、女三宮の密通を知りながら、この先も従来どおりに続けていかなければならない結婚生活を、光源氏が不本意に思うもの。だから、言語主体の光源氏にとって、そのような結婚生活を送るとは、自身の当然とするところから外れた事態と言える。nの浮舟は、妹尼から長谷参詣に誘われるが、そもそも、その利益に疑念があるうえに、気心の知れない人々との道中を考えると気乗りがしない。浮舟は、できうるかぎり人との関わりを絶っていたく、他人との物詣でなど、当然とするところから外れた事態でしかないのであった。

以上、ムヨの文が、「言語主体の当然とするところから外れた事態」を言語化するものであると考えた。そして、こうしたムヨの文の性格が、当該箇所からも見て取ることができるのである。当該箇所において、紫式部は、自邸の召使いに対しても己の才知が目立つことのないよう、抑制的に振る舞っていると述べていた。そのような在り方こそが、本来の自分の姿だというのであって、だから、人前で才知を示して、人々に知らしめるなどは、自分の当然とするところから外れたものに他ならない。そのような事態を言語化している点で、当該箇所は、hからnのムヨの文と共通するのである。

一方で、hからnのムヨの文には、相互に異なった点も見受けられ、【A】【B-1】【B-2】という区分は、そうした差異に対応させてある。当該箇所をより詳細に理解するために、それら【A】【B-1】【B-2】の別に注意しておこう。まず、【A】と【B】の差異から考えるが（【B】の中の1・2という差異は、ひとまず措く）、この【A】と【B】は、時制上、異なった性格を持つ。即ち、【A】の事態の時制が、「不定」時であるのに対し、【B】に言語化されるのは「未来」時の事態なのであった。このように、ムに未来時・不定時双方の例があること自体は、何もムヨの文に限った話ではないけれど、この未来時・不定時という別が、当該箇所の解釈にも関係するので、初めに確認しておくことにする。

まず【A】・不定時の例であるが、これらの場合、言語主体は、その不定時の事態に対して、傍観者的な立場にある。【A】のうち、hとiは『枕草子』の「随想章段」「類聚章段」の例、つまりは、清少納言が世の中を見渡し、そこに観察された事象を、いつ・誰が、という個別性を捨象して綴る底のものである。その分、言語主体の当事者性も希薄と言える。またjに述べられる「その子どもが親を知らない」という不定時の事態は、物詣でに来て偶々見かけた子どもへの感想なのだから、言語主体の仲忠はまさしく傍観者であろう。

対する【B】・未来時の例の場合、その言語主体は【A】に比して、当事者的である。たとえばmとnでは、言語主体自身に生じる未来事態が述べられる。「従来どおり、女三宮との生活を送る」こと（m）と、「よく知らない人と道中を共にする」こと（n）は、共に、言語主体の光源氏（m）と浮舟（n）が動作主体となっており、その二人にとつ

て、「当然とするところから外れた」未来事態であった。一方、kとlの事態は、言語主体のあこきや右近を動作主体としているわけではない。動作主体は男君(k)・玉鬘(1)とそれぞれであるが、このkとlには、共通したところがある。「男君が訪ねて来ない」こと(k)、「将来、玉鬘が受領の妻に納まる」こと(1)は、いずれも、言語主体のあこき(k)や右近(1)が、献身的に仕える主人、落窪の君(k)・玉鬘(1)に生じる望ましくない事態であって、だからこそ、あこきや右近にとって、「当然とするところから外れた」未来となるのである。とすると、これらk・lは、先のm・nの延長線上に置くことができるであろう。ムヨの文・未来時の系統に言語化される事態は、言語主体自身、もしくは、言語主体が一体感を抱く人物の身に生じる事態なのである。

見てきたような【A】【B】の差異を考慮に入れると、当該箇所は、未来時・不定時いずれの例と了解されるであろうか。これは結局、どちらかの解釈が完全に不可能というわけでもなく、相対的な話になるけれど、本稿は未来時の例と見るのが穏当であると思う。不定時の系統は傍観者的内容、つまりは「他人事」を述べていたのに対し、当該箇所のような、言語主体自身に生じる「言語主体の当然とするところから外れた事態」の例は、未来時において認められたからである。

こうして本稿は、当該箇所が「未来事態を表すムヨの文」であるとした。しかし、ムヨの文・未来時の例は、さらに【B-1】【B-2】という区分を受ける。そして、そのことから窺われるように、ムヨの文・未来時には、より限定的な質が認められるのである。初めに、【B-1】に属するkだが、ここで言語主体は、自身の「判断」によって未来時の事態を構成してはいない。むろん、言語化された文である以上、kとて言語主体の「判断」によるものではあるが、仔細に見ると、その「判断」の内実には、言語主体の「判断」によって構成されるのではないと言いうような面があるのだ。kの右近は、三条の「将来、玉鬘を受領に縁づけてほしい」という願いを聞き、それに反発して、「将来、玉鬘が受領の妻に納まる」という事態を言語化している。右近自身はそのような事態が出来するなどとは考えておらず、むしろ、三条の発言を聞かなければ、思いつきもしなかったであろう。その意味で、kの事態を右近の「判断」によるものではないとするのである。言わば、kのムヨの文で述べられるのは、直前の発言の事態を、そのまま言語化したものに過ぎない。言語主体・右近は、対者・三条の想定する事態に向けて、それが、自身の当然とするところから外れているとの評価を下すのである。

では、もう一方の【B-2】。これらの言語主体は、【B-1】の場合とは反対に、そこで述べられる事態を、未来時において生起しうるものと考えている。つまりは、自らの「判断」としている。加えて、その事態は、言語主体にとって生起が避けられぬ事態、或いは、何か特別なことを起こして、現状を変更しようとしてもしなければ、自動的に生じてくるような事態である。たとえば、1の「男君が訪ねて来ない」という事態は、男君からの「来られない」という連絡を受けて構成されたものであった。ここで、言語主

体のあこきにできることと言えば、せいぜいが帯刀に不満を述べる程度。結局は、「男君が訪ねて来ない」という事態の生起を受け入れるのみである。mでは、光源氏の社会的な立場からすれば、ことを荒立てるわけにもいかず、密通は見て見ぬふりでいるほかない。だから、「従来どおり、女三宮との生活を送る」という事態は、この先、確実に生じてしまう事態と言える。nで浮舟は、妹尼から長谷参詣への同行を勧められるが、妹尼が長谷参詣を発意したのは、娘の生まれ変わりかとも思われる浮舟との邂逅を感謝するためであった。浮舟は、自身が寄寓する先の主からの、自身への思いのこもった申し出を拒絶してしまわぬかぎり、長谷参詣に赴くことになる。そして、そうなったとすれば、当然、「よく知らない人と道中を共にする」という事態が伴われてくるのである。

翻って当該箇所を、これら【B-1】及び【B-2】の例に基づいて解釈してみよう。まず、【B-1】をふまえて考える場合。当該箇所は、地の文の例であるから、kの如き実際の対話がなされるわけではない。けれど、当該箇所の前には、左衛門の内侍による紫式部評「いみじうなむ才がる」が記されている。ゆえに、当該箇所が【B-1】の類例であるのだとしたら、この左衛門の内侍の評を、対者の発言であるかのように見立て、それに対して、紫式部が一人で反駁してみせたものということになるだろう。左衛門の内侍の判断「いみじうなむ才がる」から、事態「才さかし出づ」をそのまま構成し、その事態は、紫式部本来の姿からかけ離れたもの、「言語主体の当然とするところから外れた事態」と主張するのである。しかしながら、こう考えることには難点があって、それは、当該箇所が未来時の例である点に求められる。即ち、左衛門の内侍は、既に「いみじうなむ才がる」という事態が生じていると考えて、それを誹っているのだから、対する紫式部の反駁も、その既実現（と左衛門の内侍が思っているところ）の事態に向かうはずである。が、本節で検討してきたように、当該箇所では未来時、つまりは未実現の事態が述べられる。たしかに、これまで「左衛門の内侍の発言にある事態を、そのまま構成する」と言ってはきたものの、それはあくまで事態の内容に関してであって、文言までが完全に一致するのではない。けれども、逆に言えば、事態内容には大差がないわけだ。それなのに、なぜ当該箇所の言語化にあたっては、事態が既実現から未実現に変更されるのか。そこに齟齬が生じて、解釈が行き詰まるのである。

こうして【B-1】に基づく理解には難が生じてくるのだが、それでは、当該箇所を【B-2】の類例と見る場合はいかがか。【B-2】の諸例において、「言語主体の当然とするところから外れた事態」の生起は、現状からの自然な推移であった。言語主体にはそれを回避しがたいか、もしくは、その阻止に特別の行動を要するのである。当該箇所をその類例と見るということは、紫式部にとって、事態「才さかし出づ」の生起は回避しがたいもの、あるいは、阻止に特別の行動を要するものということだ。つまり、自分は召使いの前ですら謙抑に努め、それこそが本当の自分だけれど（だから、左衛門の内侍の「いみじうなむ才がる」との評は、紫式部の「当然とするところから外れた」見間違い

なもの、「いとをかし」きものである)、この先も「さる所」で才知を働かせ、それを人に披露してしまう結果になるのではないか⁶⁾。自分にそのつもりはなくとも、自ずと自分の才知が顕わになってしまうにちがいないというのである。

確認されるとおり、この【B-2】を踏まえた解釈には、特に理屈の通らない点も見受けられない。したがって、本稿は、当該箇所を上述のように解釈するのが適当であると考える。ただし、そう結論する前に、当該箇所が現れる文脈に目を向けておく必要があると思うので、次節でそれを行うことにする。

4.

前節で導いた、本稿の当該箇所に対する解釈をまとめておく。

当該箇所とは、謙抑を当然とする紫式部本来の姿から外れた「宮中で才知を働かせて、それが人の知るところになる」という事態が、この先、避けがたく生じてしまうことを嘆息する文である。

この理解は既説とかなり食い違っているであろう。本稿が、大まかに言えば、【今後「才さかし出づ」という事態が実現してしまう】と解釈するのに対して、既説とは、これも大まかに言って、【「才さかし出づ」という事態を打ち消す】解釈であった。こうした食い違いは、いささか紛糾的であるのかもしれない。よって、本節では、この解釈が、単に他の用例から導かれたというだけではなくて、『紫式部日記』の文脈に返した時にも、首肯されうるものであることを確認する。

そこで、当該箇所が続く『紫式部日記』の記述を見ていこう。次に引く○は、当該箇所直後の部分で、紫式部の幼少時代に遡った記述である。

- この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりしとき、聞きならひつつ、かの人はい遅う読みとり、忘るところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」とぞ、つねになげかれはべりし。

漢籍の手ほどきを受ける兄弟（「式部の丞といふ人」）の傍らで、むしろ紫式部の方が優秀さを発揮する結果となったため、父を嘆かせたという。紫式部の才知が自ずと表に現れ、人の知るところになったという逸話である。「あやしきまでぞさとくはべりしかば」というフレーズや、父の言葉の引用に自賛の色が顕著であろう。

- p それを、「男だに才がりぬる人はいかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめてのち、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつにあさましくはべり。読みし書などいひけむもの、目にもとめずなりてはべりしに、
- q いよいよ、かかること聞きはべりしかば、いかに人もつたへ聞きてにくむらむとはづかしさに、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、

oに続く p と q では、一転、謙抑の逸話が語られる。子どもの頃は、自ずと表出するに任せていた己の才知だが、長じて後は、それを人に見せぬ方がよいと悟ったというのである。p は、「一」という文字すら書かず、書物からも遠ざかったとする部分。さらに q では、左衛門の内侍から誹りを受けたこともあって、屏風に書かれた文字すら読めないかの如く振る舞った旨、述べられている。

- r 宮の、御前にて文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をととの夏ごろより、楽府という書二巻をぞ、しどけながら、教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。まことにかう読ませたまひなどすること、はたかのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中、ことわざしげく、憂きものにはべりけり。

p と q で語られる如く、紫式部は相当の謙抑に努めてきたけれど、やはり、その才知は表に現れる結果となった。q の後の r では、そのことが記される。中宮が紫式部に「白氏文集」を読み聞かせるよう求め、また漢籍の講義を望むので、紫式部は「楽府」の進講を開始した。けれどもそれは、「いとしのびて」「人のさぶらはぬもののひまひまに」「隠しはべり」と縷述されるように、ごく内密なものであったと、ここでも謙抑を語りはする。しかしながら、やがて、それが道長や天皇の知るところとなり、中宮に美本が献上されて紫式部が講読することとなった。結局、またも紫式部の才知が頭わになってしまったというわけである。この件を左衛門の内侍が知ったら、どれほど誹謗することかと憂慮して見せて、一連の記述は区切りを迎える。

見てきたとおり、『紫式部日記』中、当該箇所続く o から r のくだりは、紫式部の来歴を辿り、これまで紫式部の才知が自ずと表出して人に知られてきたこと、それも、長じて後は、相当な謙抑にもかかわらずそうであったことが語られていた。そして、本稿の理解する当該箇所とは、「宮中で己の才知を盛んな状態にし、表出させてしまう」とい

う、紫式部が当然としている姿からは外れた事態が、今後、生起してしまいそうだと慨嘆するものであった。この解釈は、確認してきたoからrの文脈と調和的であろう。当該箇所以示される判断に対して、oからrは、それを裏打ちするような事実を提示する機能を担うのだ。つまり、「自分は、これまでの人生においても、己の意思に反して、才知を表出させるような結果になっていた。だから、自分は、謙抑的な本当の姿から外れた事態【才さかし出づ】を、この先も実現させてしまうであろう」。当該箇所と、それに続くoからrは、こうした流れを形作る。即ち、本稿の当該箇所に対する解釈は、『紫式部日記』の文脈の中で、他の記述と有機的な関係を取り結ぶのである。

以上、当該箇所とは、言ってしまうえば、紫式部による自慢である⁷⁾。むろん、既説のように「才知をひけらかすことはしない」と解釈しても、ある種の自慢にはなるであろう。「自分には才知が無い」と言っているわけではないからだ。しかし、「謙抑に努めても、結局、己の才知が表に現れてしまう」とは、同じ自慢でも、なかなかあくの強い物言いかと思われる。当該箇所はわずか一文であるが、紫式部という人物について、我々に鮮明な印象を残す一文であった。

註

- 1) 新潮日本古典集成（新潮社）によった。なお、本稿の用例採集の対象、及び、使用本文は以下のとおりである。引用に際して適宜表記を改めた部分がある。
『源氏物語』『和泉式部日記』『堤中納言物語』・・・日本古典文学全集（小学館）
『うつほ物語』・・・新日本古典文学全集（小学館）
『伊勢物語』『落窪物語』・・・新潮日本古典集成（新潮社）
『蜻蛉日記』『枕草子』『更級日記』・・・新日本古典文学大系（岩波書店）
- 2) 本稿の調べる範囲で、7例の「さかす」を確認した（『うつほ物語』4例、『枕草子』1例、『源氏物語』1例、『堤中納言物語』1例）。なお、当該箇所に見られる「さかす」は四段活用だが、下二段活用の「さかす」もあるようだ。区別して扱ったため、上記7例に下二段活用のものは含まれていない。
- 3) 「～出づ」に関しては、文献5の調査を参考にした。
- 4) ムヨの文には、他に「意志・勧誘」系の例もあるが、明らかに別種であるため、数に含んでいない。なお、本稿は、当該箇所の解釈を行うために、ムヨの文がどのような意味内容を担うのかを考えるものである。ムヨの文における助動詞ム機能等、文法論的な議論には別稿を充てたい。その一端は、小稿「ムヨ・ラムヨ・ケムヨの文」（『日本語学会2008年度春季大会予稿集』）で触れた。
- 5) 引用は『新編国歌大観』（角川書店）による。

- 6) この「さる所」については、単に「宮中」と解するのが通例であるが、「ふるさとの女の前にてだに」との対照から、「左衛門の内侍の如き、口うるさい女房がいるような宮中」という含みがあるのかもしれない。
- 7) ただし、「才知が自ずと表出してしまうような優秀な女房がいる」との揚言は、そうした女房を抱える中宮彰子にとってプラスに働く面もあろう。だから、当該箇所が自慢以上の機能を果たしたかもしれない点について、注意しておく必要があるかと思われる。

文献

- 1 青島 徹 「疑問副詞の省略」 『国語と国文学』 1955・1 1955年
- 2 北原保雄 『『らむ』留めの歌における既定と推量』
『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂 1993年
- 3 根来 司 『『むよ』『らむよ』『けむよ』』
『藤女子大学国文学雑誌』5・6 1969年
- 4 野村剛史 「三代集ラムの構文法」
『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房 1997年
- 5 百留康晴 「複合動詞と動詞接続 『～出づ』を中心に」
『国語と国文学』2003・8 2003年
- 6 山口堯二 「喚体性の文における疑念の含意 『しづ心なく花のちるらん』の基底」
『国語国文』1988・2 1988年
- 7 山田 潔 『『しづ心なく花のちるらむ』考』
『國學院雑誌』1993・4 1993年